

アグラの水素工場長

佐 貫 亦 男*

アグラの町はデリーの南東 200 軒ばかりにあり、タージマホールで有名である。ここにはまたインド気象局の水素工場もある。ニューデリーのインド気象局で気圧計の国際比較の打合せをすませた後、この工場とタージマホールの両方を見に行くつもりで出かけた。

3月の末であったが、ニューデリーのコンノート広場からニューデリー駅まで歩いた距離は僅かながらの途中の暑さはほとんど東京の8月と変らなかつた。駅前には真紅のターバンと上着のポーターたちがならんで客を待っていた。その強烈な色彩は、暑熱の中で燃えるような印象を与えるが、これぐらいの刺激でないと、客の注意を惹かぬほどの酷暑が、やがて4月から5月にかけてやって来る。

プラットフォームで待っている列車の箱は、急行1等としてまことに粗末で、窓に鉄格子が嵌めこまれ、中には埃だらけの寝台がならべてある。戸を開けて踏みこんだ私は、すぐに留置場を想像した。汚ない室だけれどもただ天井には扇風器がいくつも取り付けられ、スイッチを入れると、むっとするように暑い風が吹き出した。

発車すると間もなく日は落ちて、続いてすぐ夜になった。沿線は黒い闇ばかりで灯のかけは見えぬ。農家の貧しさが思いやられる。

注文を取りに来た食堂車のボーイに夕食をあつらえた。やがて持って来たライスカレーの皿を窓ぎわの小卓に置くと、それが窓の外へ飛んで行きそうな勢いで列車は動揺する。悪い保線である。料理がこぼれて無くならぬうちにと口へ運ぶと、インド料理の多くがそうであるように、ただ辛いだけで、味の旨さというものは全然ない。

なおも続く闇を窓の外に眺めながら、舌に残った辛さをコップの水で消していると、灯がちりちり見えて列車はアグラの町へ入った。停車場だけは明るい。

車から降りると、体格の良い中年の男が迎えに出ていた。すぐに私を見つけて寄って来て、水素工場長のシャルマと名のつた。ニューデリーから電報が打ってあったのである。工場長がまじめな顔でいうことには

「マル博士の電報によりますと、あなたを月夜のタージマホールに案内するようにとありましたが、今晚は闇夜ですけれども。」

私はその冗談とも、まじめとも取れる話を引き取ってそれでは結構だから明日見物しますと答えた。

人口28万のアグラも、このカントンメント駅で下車すると、暗い街である。工場長の雇って来た自動車は動き出したら路次で停ってしまった。エンジンの故障らしい

下りて歩き出すと、ホテルはすぐ近くであった。帳場には品の良い英国人のマダムがいた。インドに来て、しばらく振りにほんとうの英語を聞いた。

翌朝工場長はホテルへ案内に来た。そして遠慮勝ちにいい出したことは、自分は今オートバイで来たが、その後部席に坐って回ってもらえるだろうか。私はよるこんで承知した。ホテルの玄関を見ると、赤い英国製のオートバイ、アリエルの 350cc が置いてあった。

相乗りしてタージマホールに行く道は、公園のように静かで美しく、並木の上には栗鼠と猿が遊んでいた。

タージマホールからの眠気をもよおすような淡彩のジャムナ河に沿ってオートバイを走らせてアグラ城に行った。ここもやはり、眠りの砂をかけられて永遠に封じこまれたような城であった。赤褐色の城壁は薄曇りの空の下で静まりかえっていた。

ホテルに帰るともう正午を過ぎていた。一しよに昼食にしませんかと工場長を誘うと、家で娘がひとり待っているから帰ると答えた。娘の年を聞くと11才という。何かみやげをと思ってバッグを探ったら、日本から持って来た青赤の鉛筆1本ずつと、普通の鉛筆が2本出て来た。それに新しい消しゴムとナイフを添えて持って行ってもらった。

昼食後には水素工場へ案内する約束であった。また迎えに来た工場長のオートバイは私を乗せたまま、アグラ郵便局の裏手へ入って行く。自分の家へ寄って行ってくれということであった。

晴れて来た午後の太陽が白い壁に暑く照りかえしている路次に入り、とある家の前にオートバイが止った。エンジンの音を聞きつけて家から出て来たのは、ほそい顔立ちと、黒い隈のある眼の小娘であった。父から話を聞いていたと見えて、そと私に握手の手を差し出した。

家へ入って見ると、間借りらしく、暗くて狭い。召使もいないらしい。娘の室にはクレヨンで画いた絵が壁に貼られ、机の上には私の渡した鉛筆がならべてあった。工場長の書斎には、インド海軍の肩章のついた半袖の制服姿できりりとした美人の写真が飾ってある。それは工場長の奥さんで、結婚後アグラの大学で勉強させ、海軍軍医にしたのだという。そして去年の6月まではボンベイで一家そろって暮っていたが、工場長はここへ転勤となり、奥さんはインド南端に近いコチン海軍基地へ移ったので、今は夫婦の間が 2,000 マイル離れてしまった。夫婦が会えるのは、1年に1度妻の方が休暇で来るときだけである。父親だけでは淋しいことであろうと思ひながら家の前まで見送りに出た娘に手を振って私はまたオートバイにまたがった。

アグラの南にある水素工場を見学した後、日盛りの道

* 気象庁 測器課

をオートバイで駅まで送ってもらった。その途中、工場長は突然、あの娘は実は養女で、身寄りの無い孤児をひろったのだといった。思いがけないことなので、何といたらよいか迷っていると、この娘も母親のように医者にするつもりで、それが自分の人生だと、工場長はつけ

加えた。

駅で私が汽車に乗り、握手してさよならというと、工場長は静かな表情でつぶやいた。

「世界は広いから何時また会えるかわかりませんね。」
これはまた妻へいった言葉であろう。

学 界 消 息

1 佐藤順一氏に岡田学会功労賞

岡田賞のうち学会功労賞が佐藤順一氏に贈られることに決定した。

2 新 入 会 員

遊佐三郎 (琉球気象台), 平良昌弘 (琉球気象台), 安里尚肇 (琉球気象台), 石垣和雄 (琉球気象台), 比嘉信昭 (琉球気象台), 栗林直里 (名瀬測候所), 牛島敏光 (福岡管区気象台), 小谷野正喜 (気象庁産業気象課),

寺田シゲ子 (九大農学部), 福井敏雄 (徳島測候所), 小宮書之助 (明大, 農学部), 清水啓 (福井大, 学芸学部) 宮腰潤一郎 (鳥取大, 学芸学部), 市川昌久 (仙台管区気象台), 加藤敬二 (工業技術院電気試験所), 近藤進 (東京管区気象台), 桜井澄子 (気象研究所), 中村努 (海上自衛隊), 福田矩彦 (名古屋大, 化学科), 八木恒介 (仙台管区気象台), 佐藤虎雄 (仙台管区気象台), 岡野陸夫 (海上自衛隊, 術科学校), 雪山朗 (農林省京都統計調査事務所), 新井正 (河川水温調査会)

日本気象学会創立75周年記念大会

日本気象学会創立75周年を記念し下記の通行事務を実施しますのでお知らせ致します。

1. 日時 昭和32年11月7日から10日まで
2. 場所 東京

	日 時	場 所	備 考
大会 (研究発表)	11月7日(木) 9時	気象庁・研修所	気象研究所と共催
〃 〃	8日(金)9時		
総合講演会	9日(土)9時	未定	専門的な総合講演講師(石川業六, 駒林誠, 岸保勘三郎)
記念式典	9日(土)午後	〃	
記念祝賀会	9日(土)夕刻	〃	一般的記念講演講師(和達清夫, 中谷宇吉郎)
記念講演会	10日(日)	〃	朝日・毎日新聞社後援

3. 行事日程

4. 研究発表講演申込み

締切: 9月25日 (必着のこと)

宛先: 東京都杉並区馬橋気象研究所 4の499

気象研究所 神山 恵 三

抄録: 200字以内

講演時間: 15分以内厳守

日本気象学会月例会予定

	日 時	場 所	申込・連絡先等
航空気象	10月 (航空技術打合せ後)	未定	羽田航空上松清
観測測器	11月14日	気象庁農業技術研究所 (土木, 建築, 農業気象)	気象庁清水逸郎
風に関するシンポジウム	11月11日	気象庁農業技術研究所 (土木, 建築, 農業気象, 航空, 海洋, 火災学会共催)	気象研究所神山 恵 三
気象電気	11月17日	研修所	講師内川規一, 河村謙, 川野実

日本気象学会北海道支部規約

- 第1条 本支部は社団法人日本気象学会北海道支部という。
- 第2条 本支部は事務所を札幌市北二条西十八丁目札幌管区気象台内におく。
- 第3条 本支部は北海道に在住するすべての日本気象学会会員によって構成される。
- 第4条 本支部は日本気象学会の定款の範囲内で事業を行うが、特に支部会員の研究の奨励・推進ならびに相互の連絡につとめることを目的とする。
- 第5条 本支部は前条の目的を達成するために講演会な

らびに学術的会合の開催その他本支部の目的にかなうと思われる事業を行う。

- 第6条 本支部の事業年度は毎年4月1日にはじまり翌年3月31日に終る。
- 第7条 本規約の実行に必要な細則は支部理事会の決議によって別に定める。
- 第8条 本支部に次の役員をおく。
理事 7名 (内支部長1名, 常任理事3名)
幹事 2名以内
- 第9条 理事は支部会員の互選によって定める。